

國學院大學學術情報リポジトリ

有栖川宮家伝来薫物具：薫物伝書を通じて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-11-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 潤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001187

有栖川宮家伝来薫物具 ― 薫物伝書を通じて ―

田 中 潤

1 はじめに

古代以来、香は宮廷文化の一角を占め、古典文学の中においても、四季や人々の心情の移ろい、身に付けた教養を披瀝し象徴的に表現するものとして重要な役割を果たしてきた。特に多種にわたる香料を調合して作られる薫物（たきもの）は、その香料の調合分量・手順・方法が継承の過程で秘伝化し、殊に勅作と称される天皇親作になる薫物は公家武家を問わず、人々の垂涎の的として時代を問わず珍重されてきた。

本稿では、近世靈元天皇からの血統を大正時代まで伝えた数少ない宮家の一つである有栖川宮家で用いられ、今日國學院大學に伝えられた薫物調製具と、それに納められて共に伝えられた薫物関係の伝書について紹介を行う。併せて、江戸時代の朝廷社会において薫物が果たした役割の一端を、宮家伝来の薫物伝書の整理を通じて明らかにするものである。

2 國學院大學収蔵までの経緯

薰物具の紹介に先立ち、本資料を含む有栖川宮家関係資料が國學院大學の収蔵となる経緯を略述する。大正二年（一九一三）七月、有栖川宮家最後の当主威仁親王の危篤に際し、大正天皇の御沙汰により第三皇男子光宮宣仁親王は、有栖川宮家の旧号である高松宮の称号を賜り、同宮家の祭祀を継承された。これにより、有栖川宮家に伝えられた典籍や什物は高松宮家に継承されることとなった。^①

今回紹介する有栖川宮家伝来の薰物関係資料は、典籍の形態をとるものであるが、高松宮本と通称される他の書籍類とは収蔵場所を異にし、薰物調合の道具を納めた「御薰物箱」に収納されて伝来した。高松宮家に伝来した古典籍（高松宮本）に関しては、相馬万里子氏^②、小倉慈司氏^③により、高松宮家における調査と、宮内庁や国立歴史民俗博物館への収蔵など、その経緯について整理がなされている。しかし、当該資料はこれらの調査を経なかったためか、本資料群には、整理の過程で付された番号ラベルや整理番号の墨書などは調査の痕跡は確認されない点において新出に属する資料である。

この薰物関係資料は、平成八年十月三十日に、創立百十四周年奉告のため高松宮家に参邸した佐々木周二理事長（当時）に対して、高松宮家より國學院大學にお下げ渡しの旨が伝えられた有栖川宮・高松宮御所縁の品々に含まれた作品の一つである。^④

3 「御薫物具」収納の資料について

薫物関係資料は、薫物具を収納する本体の内箱(図①)と、内箱を保護するために設けられた外箱(図②)の二重箱により保存されてきた。外箱は、桐木地に外装は黒漆塗り、内装は桐木地に和紙を内貼りとした外寸(縦四〇・五×横三二・〇×高三二・〇各cm)の台差箱で、蓋の甲には「御薫物具」の銀字蒔絵が施されている。現状では台差の蓋を受ける部分が欠損しているが、当初は葛籠掛けの紐を伴っていたと思われる。高松宮家旧蔵品になる他の作品群と同様に、蓋の甲の部分と、側面の二方向に収納内容物を明示する墨書押紙が施されている。この薫物具については、蓋の甲と側面の二方向に同時期に貼られたと思われる「有栖川宮」・「御薫物具」の墨書押紙が各一枚貼られており、またこれに先行して貼られたと思しき「御薫物具」と「三十八」と墨書された押紙が側面の一方に貼られている。また比較的新しい時期の整理に関係すると思われる「香合/19」という通し番号が印字された白いラベルも蓋の甲の部分と、側面の二方向に貼られている。

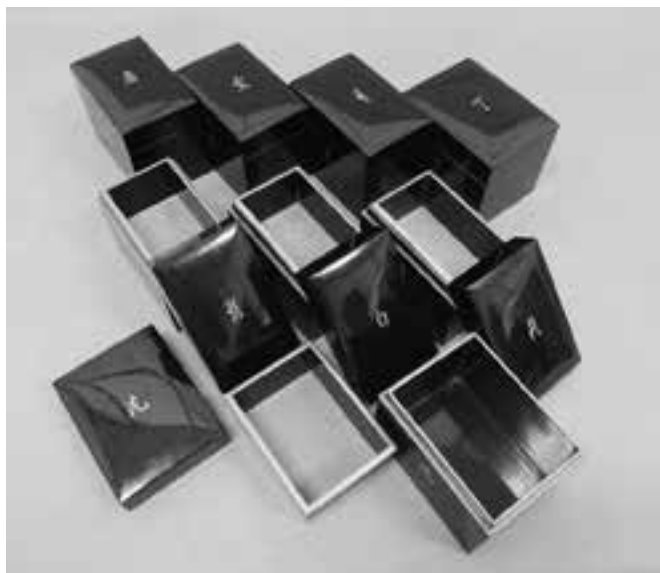
内箱は、ウコン染めの木綿布に包まれて外箱に収められている。内箱は、外寸(縦三七・五×横二九・一×高二六・七各cm)で内外ともに黒の真塗とし、身の底面を除く、蓋と身の外側には八重の表菊・裏菊が三種類の技法を使い分け、蓋に二五個、身に三八個を蒔絵した被せ箱で、中には掛子が設けられ、身・蓋・掛子の木口は面金されている。掛子には八つの盛蓋の小箱型をした篩(ふるい)が納められており(図③)、小箱の中に更に設けられた掛子は、その底に粗密各種の裂を張った篩の形状で、篩われた粉末が小箱の身に溜まる構造とされている。蓋の甲と身の一面にはそれぞれ「沈」・「丁」・「薫」・「貝」・「甘」・「白」・「麝」・「鬱」の金文字蒔絵がある。それぞれ調香に用いられる沈香・丁子・薫陸・貝香・甘松・白檀・麝香・鬱金用の篩で、「沈」と「丁」のみ幅が一・五cm狭い。なおこの薫物



図① 内箱



図② 外箱



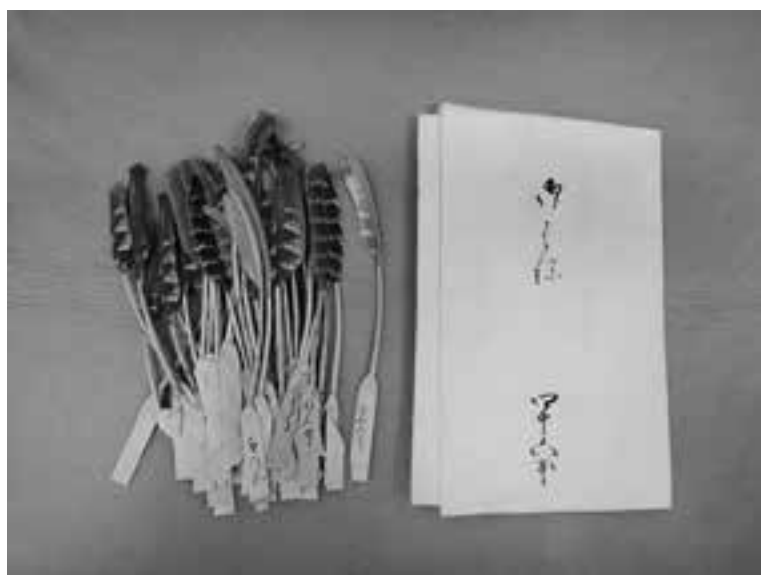
図③ 懸子

箱と法量・様式・蒔絵などの点において類似した作品が尾張徳川家の徳川美術館に伝えられており、中には調香に用いられた筆・匙・篋が納められている⁽⁵⁾。

薫物具箱に納められた道具類は、概ね宮家での贈答に用いられた太刀目録などの反故紙を転用した厚手の包み紙により種類別に整理されており、包みの表には類似した筆跡で内容が上書きされている。掲載した表は、内容に関する整理をもとに作成した目録である。内容物はいずれも薫物の調製に必要な篋、匙、箸(図④)、羽(図⑤)、水晶製のすり棒や陶器製の乳鉢などである。注目されるのが、8番の包み紙の上書に「享和元六御改」との記載が確認され、折に触れて整理がなされている様子が見える。香料の実物は、4番の包みに貝香の実物がまつまって納められているほかに香料自体は収納されており、小箱形の篩・箸・篋・笏・乳鉢など、使用の痕跡は認められるが、いずれも清拭されて納められている。



図④ 筵 匙 箸



図⑤ 羽

4 有栖川宮家の贈答にみる薫物の位置付け

こうした薫物具を用いて調整された薫物は朝廷社会においてどのように用いられてきたのであろうか。朝廷における贈答に際して用いられた薫物や匂袋について、近世前期の正親町天皇・後陽成天皇期をピークとして天皇親作が数多く下賜されてきたことが本間洋子氏により紹介されている。その中で織豊政権から徳川政変への移行期においては、賜与側では朝廷安泰を期待した賜物であり、受領者側では天皇親作の王朝時代以来の由緒を持つ薫物を贈られることに意味があったと評価し、江戸幕府安定期以降は薫物の下賜に関する記録が『御湯殿の上の日記』からは減少していくとして⁽⁶⁾いる。

下賜数が減少していくとされる薫物であるが、先述のような調香道具を備えた有栖川宮家では、薫物などの贈答はどのようになされていたのであろうか。次に挙げる資料は、有栖川宮家の歴代行実から、薫物・匂い袋関連する記事を抽出したものである。(資料中の傍線は筆者による。)

・(寛永八年・私註以下同) 六月下浣以来前將軍徳川秀忠病むを以て、八月八日、本郷右近を江戸に遣し金地院崇傳(本光國師)に頼み、親ら御調合の薫物一合を贈りて其の病を問はしめらる。⁽⁷⁾

・(寛文一〇年) 八月二八日仮邸より新邸に移徙せらる。新邸は花町旧邸の敷地に経営ありしものにして將軍家綱は宮作費二千両を献進す。仍りて其の謝礼の為に九月十三日家司矢島兵庫助(宗在)を江戸に遣し、家綱に太刀・銀馬代及び薫物を贈り、老中・若年寄・高家等に物を賜ふ。⁽⁸⁾

・(延宝) 四年幕府當邸造宮費二千両を献進す。仍ち近習山本主税助を江戸に遣して之を謝し、將軍に太刀銀馬代・匂袋十箱を贈り、老中・高家等に各々薫物一合を賜ふ。また松平越後守(光長)に薫物二合を贈与せらる。⁽⁹⁾

- ・(延宝八年三月十日) 是日、打枝(薰物三種薄様に居、雲足の臺に載す)を家綱に贈らる。⁽¹⁰⁾
- ・(貞享二年三月七日・將軍代替慶賀閑東下向將軍対面に際し) 今朝親王より薰物三種を綱吉に贈らせらる。⁽¹¹⁾
- ・(貞享五年七月十日富貴宮養子許可御礼) 綱吉に太刀銀馬代及び匂袋を贈らせらる。⁽¹²⁾
- ・(元禄一〇年三月七日王女英宮入内) 女御入内の祝として(中略) 上皇より太刀馬代金・薰物並に薄様一包。⁽¹³⁾
- ・(元禄一六年一月二六日正仁親王姉淑宮東本願寺入興) 一月二六日、淑宮に薰物・伽羅を進めらる。薰物は勅方なり。⁽¹⁴⁾

・(九月五日) 又同宮(輪王寺宮)の当邸を辞去せらるるに際し、後西天皇勅方の薰物(新枕)・幸仁親王御作牡丹の造花一輪(錫花入)を進ぜらる。⁽¹⁵⁾

・四月二一日、新院附武家山口安房守(直重)に後西天皇勅方薰物(新枕)を賜ふ。⁽¹⁶⁾

・是日、打枝(薰物若草・玉椿・仙人)を家宣に贈らせらる。⁽¹⁷⁾

・二十九日、尾張中納言(吉通)に内証音物として勅方薰物二種(玉椿・仙人)・三部抄一部(公卿三筆、外題右大臣)を同室に勅方薰物二種(若草・仙人)⁽¹⁸⁾

編纂資料からの収集ではあるが、幕府など武家への薰物の下賜は、宮邸新築に対しての返礼、將軍襲職の慶賀、老中・高家・御三家・親藩当主・附武家への賜物など、宮家にとって重要な案件や幕府重役への賜物として用いられている。特に、親王自らの調査がなされていることや、調査に際しては、勅方による調査であることが特記されており、贈答に用いられる薰物として、親作であること、調香の方が勅方であることが何より重視されていたことがうかがえる。一方禁裏や縁戚との贈答においても、同様の傾向がうかがえる。

5 有栖川宮家伝来薫物伝書

こうした薫物の調製において重視され、本資料群の内です特に注目されるのが、薫物製作に不可欠な調香の為の伝書であり、それぞれの製法・分量を記した切紙・折紙の類である(図⑥)。伝統的な六種の薫物や新作薫物の方に関する折紙、切紙のほか、表の内9番・11番・24番の紙包にまとめられている。近年薫物に関する研究が進展しており、本資料群にも含まれる「薫物故事」は諸伝本間での異同の検討など、伝承の経緯と共に検討が加えられているほか、「薫物方」⁽²⁰⁾・「薫物黒方秘方」⁽²¹⁾・「薫物調合秘方」⁽²²⁾など朝廷所縁の伝書の翻刻が徐々に積み重ねられている⁽²³⁾。

本稿で紹介する薫物伝書は、有栖川宮家伝来という極めて皇統に近い宮家に伝えられた薫物伝書であること。調香具と共に伝えられたこと。宮家から皇統を継ぎ、薫物の継承に深く関わったとされる後西天皇(良仁親王)の皇子で三代当主の幸仁親王の書写にかかる伝書を含むこと、江戸初期以降の新作薫物の方など、朝廷における薫物文化を考



図⑥ 薫物伝書

えて行く上で重要な資料である。この内【資料6】24―3については、書写名は確認されないが、書体・書風から宮家二代の良仁親王（後の後西天皇）の書写も考慮され得る。

本資料群で特に注目されるのは、【資料7】24―4・【資料8】24―5の有栖川宮幸仁親王の手になる伝書二冊である。両者とも元禄五年四月晦日と同五月朔日に親王が今出川（菊亭）公規所持の伝本を親王が書写した旨の奥書があるが、後者についてはその本とも考えられる今出川公規書写になる伝書が24―10止として含まれ、巻末には「菊亭蔵書」「公規」の印影が確認される。調香の内容は極めて多岐にわたり、各所に架蔵される諸本間の異動については今後における伝書内容の比較を要するが、江戸時代の世襲親王家としての有栖川宮家における薰物調合の根幹を知り、薰物文化の実態を現代に伝える資料として今後の活用に資することを願うものである。

6 おわりに

高松宮本の来歴について小倉慈司氏は「高松宮本の大部分は、幸仁親王・職仁親王の時期に形成されたと考えてよいであろう²⁴⁾」としておられるが、この薰物伝書の集成に關しても、書写の経緯などを含めて同時期における書写・収書活動がなされたことを示す好材料である。有栖川御流や歌道の御所伝授など、文化・文芸・芸術に深く関わった世襲親王家という側面と共に、薰物という王朝以来の宮廷文化にも深く根差した有栖川宮家の様子を現代に伝える貴重な資料といえよう。

註

- (1) 『高松宮宣仁親王』「高松宮宣仁親王」伝記刊行委員会編 朝日新聞社 一九九一。
- (2) 相馬万里子「高松宮旧藏禁裏本と有栖川宮伝来書籍について」『国立歴史民俗博物館資料目録8—2 高松宮家伝来禁裏本目録〔奥書刊記集成・解説編〕』二〇〇九。
- (3) 小倉慈司「高松宮家伝来禁裏本」の来歴とその資料価値—歴史資料を中心に—『国立歴史民俗博物館資料目録8—2 高松宮家伝来禁裏本目録〔奥書刊記集成・解説編〕』二〇〇九。
- (4) 國學院大學『有栖川宮家ゆかりの名品』國學院大學 一九九七。
- (5) 徳川美術館所蔵、菊蒔絵薰物製造箱一具。(高二六・五 縦三七・九 横二九・二。) 荒川浩和監修『香道具』淡交社 二〇〇五 一二七頁(図版)・二四三頁(解説)。
- (6) 本間洋子「『御湯殿の上の日記』にみられる薰物・匂い袋下賜—後土御門天皇期から靈元天皇期—」『武蔵大學総合研究所紀要』一六 二〇〇六。
- (7) 『好仁親王行実』開明堂 一九三七 四十八頁。
- (8) 『幸仁親王行実』開明堂 一九三七 八頁。
- (9) 『同右』三〇頁。
- (10) 『同右』三一頁。
- (11) 『同右』四五頁。
- (12) 『同右』七四頁。

- (13) 『同右』 一一六頁。
- (14) 『正仁親王行実』 開明堂 一九三七 二二頁。
- (15) 『同右』 五四頁。
- (16) 『同右』 六二頁。
- (17) 『同右』 九九頁。
- (18) 『同右』 一〇〇頁。
- (19) 田中圭子「菊亭文庫所藏『薰物故書』翻刻と校異」(上)(下)『芸能史研究』 一七五・七 二〇〇六・七。
- (20) 矢野環「香書『薰物方』—竹幽文庫本—」『文化情報学』 一(二) 二〇〇六。田中圭子「宮内庁書陵部所藏『薰物方』影印と翻刻」『広島女学院大学国語国文学誌』 三八 二〇〇八。
- (21) 田中圭子「宮内庁書陵部所藏『薰物黒方秘方』翻刻」『広島女学院大学日本文学』 一九 二〇〇九。
- (22) 同「東山御文庫所藏『薰物調合秘方』解説と釈文—杏雨書屋所藏『香秘書』享受史一考」『杏雨』 一四 二〇一。
- (23) 田中圭子『薰集類抄の研究 附・薰物資料集成—』三弥井書店 二〇一二。本間洋子『香道の文化史』歴史文化ライブラリー四九九 吉川弘文館 二〇二〇。堀口悟・鈴木健夫・村田真知子『江戸初期の香文化—香がつなく文化ネットワーク』文学通信 二〇二〇。
- (24) 前掲註(3) 小倉 二〇〇九。

謝辞 本稿作成に際しまして御世話になりました、大東敬明氏・長倉絵梨子氏ほか、関係各位に御礼申し上げます。

有栖川宮家伝来薰物伝書 翻刻

(凡例)

紙面の関係上、改行を「／」で示し、本文を詰めて表記した。但し、本紙の表裏、紙継、長文資料については、翻刻者の判断において、一つ書きなどの改行を残した。

史料中の図は(図)とし、文中の○・■などはそのまま表記した。

虫損・写し崩れなどで判読が困難な場合は□で表記した。

割書きは本文と同じポイントで表記し、丸括弧()で括って表記した。

合点は鈎括弧「」で表記した。

旧字・仮名などではできる限る原本通りの表記とした。

合点などの全体に及ぶ朱筆記載については、個別の注記を割愛した。

【資料1】 6-2 「御目録(香道具目録)」

(表) 御目録／ちやうしへら五本／まゆつくり壺本／麝香のはし六本／同へら壺本／しほさし二本／へら二本／はし二せん／へら壺本／はし五本／小しゃく二本／しほすみのさし二本／ほしへら一本／同はし一せん／かいかうほす時のはし五せん／同へら一本／りうのうへら三本／はし壺せん／銀のさし壺本／きね二本／はね廿四本／かうくこしらへの羽六本／

(裏) にはち十／にうもく壺本／つゝみ紙十四／しほさし二本／はし三本／かけこのふるい八ツ／以上／外二／金
白同杵共／ミつなへふた共／

【資料2】 6—6 「御所望被遊候覚」

御所望被遊候覚／一丁子へら五本乃内／二本／一大へら三本之内一本／一麝香の箸三せんの内／一せん／一かいかう
ほす時のはし／五せんの内二せん／一りうのうへら三本の内／壺本／一きね二本の内壺本／一香具拵の羽六本之内／
三本／一つ、み紙十四之内二／一しほさし二本／一にはち十之内二ツ／

【資料3】 7—2 「匂袋之方(勅方十六種)」

(1・表) (墨付なし) (1・裏) (墨付なし)

(2・表) 匂袋之方／青柳／伽羅三分三朱 麝香同／丁子一朱 れいりやう香同／しらきく／菊花二しゆ 龍腦同／
白たん一分 甘松一分一しゆ／丁子一分二しゆ／あけほの／かんせう二分二朱 ひやく檀三分三朱／木香一分 龍
のふ同／藤はかま／

(2・裏) 竜のふ一朱 甘松一分／伽羅一分二しゆ 丁子二分／白たむ一両／はつね／龍腦一分 沈香同／かんせう
同 木かう同／丁子同 白たむ一両／しほかま／白檀一分 かんせう同／りうのふ同或一分一しゆ 丁子同／若葉
／ひやくたん三分三朱 木香一分／

(3・表) かんせう同 れいりやう香同／ちやうし二分三朱／落葉／白たん三分三しゆ あせんやく二朱／あんそく
香同 沈香半両／丁子三朱 龍のふ同／あやめ／丁子一分一朱 甘松半両／ひやくたん同 もつこう二朱／良香同

さんな一しゆ／しんゐ半朱 りうのふ一朱朱中／さかう三朱 麝香油二しゆ／

(3・裏) しゃうふ銀朱中／千鳥／丁子二分三しゆ 白たん一分一朱／かんせう同 生もく香二分／ういきやう二分
れうかう二朱／龍腦三しゆ／水とり／さかう一朱 りうのふ壺しゆ／かん松二朱 白檀三しゆ／れいれう香二しゆ
くんろく一分／丁子三分三しゆ とつくわつ朱中／須磨／

(4・表) 丁子三分三朱 白檀二分／くわつ香一分 しゃうふこんしゆ中／龍のふ二朱 良香一朱／うこん一しゆ
さかう一朱／ミたれかみ／りうのふ半朱 白たん一分／さかう半朱 かんせう一分／丁子二両 うゐきやう一分／
なをさり／れいりやう三朱 うこむ一分一しゆ／りうのふ一分 てうし一分一しゆ／八重一へ／

(4・裏) かんせう半両 てうし一朱／白たん半両 もつこう一朱朱中／龍腦二しゆ 良香一しゆ／うこん同 さか
う同／濱千とり／大黄六両 丁子八両／甘松十両 はいそう十両／白たん八両 しんゐ十両／龍腦三分三朱 さん
な四両／さかう一両半／右勅方十六種／

【資料4】 7-5 「靈元院御流和合次第」

(1紙) 靈元院御流／和合次第／文厘ノ上ニこふくさの様ヲ敷沈ヲ置其上へ／白たんヲ入ませて小笏にて切いつれも
右の通也／但沈白貝薫丁麝何ニても此のことし猶有口傳／さかうは如傳受／

(2紙) 子日ヲ合候時生腦白たんの付ニ入こねたてあまり生のふ／すくなかるゆへ也／

一和合次第／黒方／一ふんこのふたニ鳥子を／しきて沈をよこへ／なかく／おくへしそのちんの／うへニ／ちやう
しおなしこくとくにて／沈丁かきませくる也／小しやくニてもきさミ様口傳／さてかきませて(図)かく／のこくとく
鳥の子かミのうへニ／なりをなし(図)このすしニ／貝くん入るへし／くんろくハ／はかりより粉のこゝすハ／お

ちにくきゆへ沈丁も／まふしてはらふ也／尤口傳色々有之／またかきませてきさミ／またよこニ／なかくしてはすニすしひきて／白たんの入又かきまわして／(図) かくのこことく小しやくニて／いたし(図) 又かくのこことくニ／なりをし○まへつ、ニ／あつうすなかきやミしん／(図) かくのこことくまろきニ／すしつけ／すしの中へ麝ヲ／まゆはけニて／おとし外へものゝす／まへつ、ミ／かりかけてまんまろなかニ／口傳のこことく左右くニ／きさミ／かきませてかなうすニ／入てすみよきほとさし候事／(図) 口傳又かきおとして／かなうすニおとし／候也此拍子口傳又塩／さし候事／よきほとなるへし／ちんの／ちんちりとなるほとよく候也／その、ち同前／又蜜ハよきほと也／さのミ口傳／なしその、ちかなうすニて／さく也かすの事別記ニ有／額ニしたかふへし／可秘々々乱々／□候時ならて／これを／ミる事なかれく／あなかしこ／今案兎角二つ、香ませて／

(3紙) とかくさかうハ別なる事也／

【資料5】 9—2—3 「(九重・ユウケツ・竹門主方三種合わせ様)」

(1紙) 九重 甘松二分一朱 丁子一分二朱／白檀一分二朱 木香一分二朱／良香三朱 茴香三朱／龍腦二朱 广香二朱／ユウケツ／麝香一分二朱 龍腦二分／
(2・紙) 甘松一分二朱 阿仙藥三朱／安息香三朱 白檀三分／竹門主方／丁子七分 白檀二両／甘松一両 木香五分／安息香一両 茴香一両／龍腦一分 章腦少／

【資料6】 24—3 「(炭方禁中ヨリ慶長元十二傳候・・・)」

(1紙) 炭方 禁中ヨリ慶長元十二／二傳候／沈一両二朱 丁二分／白一分 薰一分／貝三朱(或二朱) 麝二朱(或

三朱／又或二朱半）／口傳云貝ハこしらへて久しく／成たるハ三朱尤よろし當座／こしらへたるハにほひはなハた／しきゆへ二朱よろしきよし／故院仰云々／驛もふるくにほひなきハ三朱も／二朱半もよし沈は善惡に／よりて二朱をげんする也／薰物あはせおほくさるあいたは／貝をすこしひかへたるがよろし／きよし 仰られ候キ／くんろくもおなし／一 黒方／薰物の中ニ殊に大事の方也／

(2紙) 何のにほひともしれぬことくしかも／すくれてかうハしきやうニあるへし／自余の方ハミなその名に付たる／にせ物のにほひなれハ大事なから／やすかるへしよく分別すへし／くろ方といふ心歎何ともしれぬ／こゝろ也／本云／私云玄ノ字の心ニテ心得ヘキ也／黒方ニハ黒ノ字を銘にかゝす／方ノ字ハかりを書へしこれ故実／也云々／一 四季方／梅花(春) 荷葉(夏) 侍従(秋) 落葉(冬)／此外古方ハくろ方など也さて／其後合出したる方多し／盧橘 ハナタチバナ 菊花 キク 千種 チウサ 仙人 ヤマト 有明 ノカセ 野風 ヤハ 野梅 ヤマツハキ 玉椿／富士 春日野 新枕 若草／此外不可勝計／此内三光院説云菊花ヨリ／千種 野風をハあわせいたし／たりと云々／千種のはなのにほひを吹をくり／たる秋かせのにほひなるへし／又仙人も菊花ヨリいてたる也／

(3紙) 仙人の折袖にほふ菊の露／うちらはらふにも千世ハへぬへし此哥／のこゝろ也云々、仙人の袖に／うつりたるきくの香なれはいか／にもほのかなるにほひ也／春日野ハ煙硝えんせうを加ル也とぶ／火の心あり／有明ハ妙善院殿(常德院殿 御母准后)／合せいたし給云々紹巴其方を／つたへしと云々／富士ハ常の黒方ニ生腦をくハへ／たる物也とぞ 陽光院の仰／ありし但生腦の分兩をハ／たしかニ不覺悟也／香具事／一 蜜／見様の事爪の上ニすこし／をきてミるにならるゝ心あるハ惡シ／玉のことくニ成ていかにもさらく／としたるよし高麗蜜ハつき也／さたうの入たるハ必なたるゝ也／一 ねりやうの事／湯せんニする也、問鍋かんなべよしわら／にてちやわんのすハる程に輪をして／すふへしなへにしきに茶わん／をすへたればあしゝ、さて湯ハ／ちやわんの中の蜜よりも／少下ニあるへし蜜より

も／

(4紙) 上へ湯あかれハは茶碗わるゝ也／火をハゆるくとさのミつよから／ぬやうにしてそろくとねる／へしうへにうかふ泡^{あへ}を竹の／はしにてのくへしあはのたち／やむをかきりにねる也又泡の／すこしもたゝぬ蜜あり是は／一たんあしき也不可用云々／さてねりたる蜜を水の中に／ちやわんにひやしてをくへし／さてあわせさまに布にてこすへし／ねりたるミつに塩のとけて／水になりたるを入る也もとけ／たる塩なくハ蜜をとり分てしほ／をときて入へし水にてきたる／はあしき也かくのこつくしたる／蜜にてあはせたるハ何程をきて／もくるしからぬ也是あはせさまの事也／一 入物ハ茶碗のものよし／一 沈香／一 香の品の事さのミ上くの／沈香迦羅まなむはん以下の／一かどにほひあるハあしくくろミ／などのすぎたるもあしゝきめにて／何となきにほひなるしかるへし／一 きさミ様の事／轉法輪の流にハほそくわり少々／けつりて四方にきさむ 勅作／

(5紙) にハたゝうすくきさミて手にて／もミくたくやうにして用也／一 ふるいハ竹のこまかなるとをし／にてふるふへし又もぢの布のふときふるいもよし／一 禾^{のき}二成たるをハのそきすつへし／又粉^こ二なりたるをもこまかなる／ふるいにてのそくへし此二色／入たるハにほひあしき也／一 丁香／一 香具事折てミるにしるの／おほきを用へしいかにも上品／をあらふ事也／一 枝丁子母^ボ丁子又花の處を／制^{せい}のそくへし／一 沈香などハ異香すくなき故二／きさミて用丁子などハにほひ／はなはたしそれはきさむに／をよはす鉞白にてつきくたき／たるハ品也／一 ふるいハ精好也自余のかうく／のふるいにおなし／一 母丁子花丁子ハ時によりて／用る事あり方にあるへし／右口傳云花丁子ハ本の丁子／を入れハにほひ過る又少にほひ／ふそくなる時ハ可用々々母丁子／ハ方によりて入る事あり／

(6紙) ○／一 ほしにハ丁子の粉を蜜にねり／あはせて用 ねりたる蜜のあたゝ／かなる時ねりあはせてさまし／

て沈麝をハ付てほすへし／一 甲香／一 煎^{コヤウ}様事／鐵^{てつ}の鍋^{なべ}二只の灰を入テ水にて／よく煎する也程らいハ二重に／をりてミるにおれぬ程に煎す／へし此せんするハくさけをいた／さんためハかり也／一 すり様の事／貝のふたの内ニ取つきたる跡たかく／してある也それをはつりおとして／こそけたるよし貝の取付たる／ゆへにくさけのふかき也外の方／ハ泥土^{でいど}のしミたる也いかにもうすく／ミへすくやうニすりたるよき也／かはらにあて、すりたるがよき／なりゆひのはらニかミをあて、／すれハてをそんぜすしてよき也／一 すりたるかいかうを^と調へやうくすり／なへニ水を入テさじにて蜜／を入て煎する也火をつよくして／一時ハかりせんす水も蜜もかい／香の多少によるへしせんする／時蜜ハかり甲香にしミ付たる也／此ほとらい一段大事也取上て／

(7紙) ミレハ少シ手ニにとくとする／心ある程よしさて水なうにて／こしてきよき水にて二三反／あらふへしさて鐵のあふりこ／にて紙をひとへしきて火を／ぬるくとしてあふる也紙ハ／美濃紙の上よし鳥のこは／次也杉原をハかつて不可用／くさけのあるゆへ也鐵のあふり／こなくハ竹のにてもくるし／からす但此時ハ紙を二重／もしくはし竹はしにてかへし／あふるへし／一 あふる程らいの事／ゆひにてくたくにほろりとする／様ニあふりたるよしせんする時／蜜を過せハしハくとして／くたけぬ也それをあふり過せハ／猶しハくとなる也又蜜をひかへ／たるハにほひふそくなる心あり／此たなかう入されは不成事也／一 尋^{じんじやう}常にハ湯に蜜を入甲香を／ひたして其ま、とりいたして／あふる也是ハ達匠の仕様也／一 蜜にてせんするハ甲香に蜜を／よくくしませんため也蜜にて／煎たるうへハいかやうに水にてあら／いてもかいかうに水ハしまぬ也／

(7紙止) 一 或説すり甲香ニ蜜をぬり／てくろくなるほど火にてじき／にやきてもおなし／或説此と、のへやうハいそく時／の用事也しせんハ可用也／中品也／一 篩^{フルイ}甲香のあらきハあしき／一 たんとこまかなるせいかうを／用へし／一 くすりくたきにてをろすへし／(裏面墨付なし)

【資料7】 24—4 (薰物のほうさまくなれとも・・・)

(表紙・表) (墨付無し) / (表紙・見返し) (墨付無し) / (1・表) (墨付無し) / (1・裏) (墨付無し) /

(2・才) 薰物のほうさまくなれともつね / にはあはするは六さくなり / 「梅花」黒方「侍従」 / 「落葉」菊花「荷葉」
 はハ時にしたかひて昔の人ハ / あはせ候へとも今の世には時しも / みえす春ハはい花梅の花の / にほひに似たる夏
 ハかようはす / の花の香にかよへり秋は落葉紅 / 葉のちる比心すこき匂ひなり冬ハ /

(2・ウ) 菊花きくの花の香にことならず / 小野の宮殿の方には長生久 / 観の香なりとしるされたり黒 / 方ハ冬ふか
 くさゑたるにあさから / ぬにほひなり侍従ハ秋風せうさく / として心よくきほとによそへたり / か、れといまの世
 にくろほうのミそ / あはする香の草すくなくして / その匂ひすくれたる遊へなり / かなうすの次第 /

(3・表) 「沈」丁子「白檀」薰陸「貝香」ある方にハすくなき香よりまつ / つくへしとありちんをはのちにつく / へ
 き也香のかはらんだひことに / かなうすきねをよくのこふへし / いまたあはせぬさきにハ香ともよく / へちくにす
 へしちりはかりも / かよひぬれハ香をうしなふ沈 / 丁子ハことになかあしき物なり / もろくの香をふるうとき /

(3・裏) かまへて風にあてすしてしつ / かにふるふへしあらくすれハかう / あらく又こまかなれハミめハよ / けれ
 ともたく時ふくれあかりて / とくかへしのかになる也これをよく / かまへてよきほとにすへし /

和合次第 / ■黒方 / 「沈」貝香「麝香」白檀「薰陸」丁子 有口傳 / 散和合様 / はこのふたの上にうすやうを二三 /

(4・表) まいしきて其うへにむらなく沈を / をきてそのうへにかいかうつきに / くんろくひやくたん丁子を次第 /
 のことくむらなくをきてかき / あはせて梅のかたなにてかう / しをつけて (図) 麝香をこの / かうしのうちにふり
 て又むらなく / かきあはせてのちこれをよくこ、 / ろミるへしもろくの香の / す、ミをくれたるをかきわかちて /
 (4・裏) 今度のにてかけんすへしこの / たひハ「丁」白「薰」貝「沈」と / をきてはしめのことくかき合 / てさかう

(8・表) 梅花 梅の花を人事口傳 春もちゐ候／「沈四両 丁子二両／貝香二分 甘松二朱／麝香二朱／「ちん四両 ちやう 二両／かい三分 かん二分／くん二分 さ二分／「沈五両 丁子二両／貝香二分(小) かん松二分

／さかう二分(大)／

(8・裏) 白梅^{はくばい}／「ちん一両 丁二分(小)／貝一分半 薰一朱／白二朱 甘半朱／うこん半朱 さかう半朱／荷葉(夏
しやうれん葉)／「ちん三両 かん松三分／かいかう一両一分 白たん一分／うこん一朱 くん六二分／くわかう
二分 丁子一両半／

(9・表) さ香一分半／「沈四両 甘三朱／貝一両半／白一朱 鬱一分／霍二朱半 丁一両二分／青木一朱 安息香
一朱／盧橘(ゑやうしやしけん)／「沈四両 丁二両／貝一両一分 青木一朱／くわかう一分 そかうゆ一朱／菊
花(秋きくニ有口傳)／

(9・裏) 「沈四両 丁一両／貝三分 薰三朱／甘三朱 麝一分／「ちん二両 ちやう一両／かい三分 くん三朱／か
ん三朱 さ二分／「沈二両 丁二分／貝一分半 薰一朱半／甘一朱半 麝三朱／侍従(紅葉をかたとる)／

(10・表) 「沈四両 丁二両／貝一両 甘一両／麝一分／「沈^{ホマ}四両 丁子二両／貝香一両 甘松一分／占唐一分三朱／
「沈二両 丁一両／貝一分 甘一朱／鬱一朱／「ちん二両 ちやう一両／

(10・裏) 貝一分二朱 甘一分／白一分／千種／「ちん五両 丁子二両／かい香一両 白たん一両／くん六二両／う
こん一両／かんせう二分 さ香二分／

(11・表) 黒方／一沈香四両(如常)／一丁子二両(薰衣香ナトニ入タル風ノ引タルヲ)／一白檀三両三分(如常)
／一貝香二分(諱火ウスクスリヲロシ水ヒ三十返カケホシ)／一薰陸二分(如常)／一麝二分二朱(如常)／麝大
形ニスリテ薰陸トスリ合／調合也／

(11・裏) 以今出川前内府(公規公)所持／故筆之本令書畢／元禄五五朔 兵部尚書(花押)親王

(12・表) (墨付無し)／(12・裏) (墨付なし)／(裏表紙・裏) (墨付無し)／(裏表紙・表) (墨付無し) (了)

【資料 8】 24—5 「四辻家相伝薫物伝書」

(表紙・表) (墨付け無し) (表紙・裏) (墨付け無し)

(1・表) (墨付け無し) / (1・裏) (墨付け無し)

(2・表) △黒方 / 「沈・四両 (細ニワリテ虫クヒ木ノクチナトヲケツリテ / 米ノツフナトホトニキサムアマリ細ク粉ニシタルハ悪シ) / 少ヲモクテモ / 不苦 / 「丁子・二両 (花ヲサリ目ヲサリテキサミヲロシフルウ) / 同 / 「甲香・一両 (水ニテヨクアフリフルウ又蜜ヲ水ニテ / 古酒ノ色ホトニノヘ其蜜ニツケテアフリコニテ / アフリ其後キサミフルウ) / 少カロキカヨシ / 「白檀・二分 (ソノマ、キサミフルウ) / 同 / 「薰陸・一分二朱 (ソノマ、ヲロシフルウ) / 少カロク入タルカヨシナラヒ也) / 「麝香・二分 (ヨクスリ毛ヲエラヒチリヲエラヒ / テフルフ) / 少シヲモクテモヨシ / 「蜜 金ハチニ入アハノタ、ヌホトニ湯センニメ / アハヲトル也 /

(2・裏) 「重様之叟 / 「一番沈二番「丁子三「甲香四「白檀五「薫物 (陸敷) 六「麝香 / 「先一番ニ沈を文匣ノフタなどのやうなるいかにもろくなる物ニ / とりのこを敷其上ヘ沈をさじにていかにもろくニして / 其上ヘさじにて丁子をまんへんなるやう / にふるひかけそれをさじにてよくまじる様ニ / まずへしいつれも如此次第右ニ見タリ / 「麝香をハ「沈「丁「甲「白「薫を合せたる粉をろ / くになをして其二 (九字の形) 此やうに筋を / 引其筋の中ヘふるひかくる也 / 蜜よきほとに入て金白ニ入三千つくへし成程 / 五千六千もつくほとよし / 夏は蜜少なかるへし「塩又黒ニ口傳有之 /

(3・表) △仙人 伏見殿方 / 「沈二両「丁子一両「白一朱「薰一朱「麝一分 / △黒方 勅方 / 「沈三両「丁一両二分「白三分「薰三分 / 「貝香二分一朱「麝一分二朱 / 「薰衣香 / 「かんせう三両「くわかう二両 / 「沈一両「丁子一両二分「さかうのかわ一両 (こまかに / きさむ) / 「白たん三分 (こまかに / けつりて / あわせ) / 「うこん二

分「くんろく 二分／いづれもきさミてこまかにしてあわす／

(3・裏)「同／「丁子二両二分」「甘松一両二分／「くわかう一分二分^兩」「せんきう一分／「しやうかう一分／きねに〇これほとにつゝミて中へ灯心／を入くわへて口をゆひて一袋二一つ、入よ、／「けいしん一分」「たうき一分／「ういきやう 一朱(かはらけにていりて上のかはをてつす)／以上／黒方 四季通用祝言之時も用之也／「二沈四両」「丁子二両／

(4・表)「一貝香一両」「一薰陸一分／「一白檀一分」「一麝香二分／「黒方「秘中極秘也／「二沈(二分ヒカ)」「一丁二分一朱／「一白一分一朱」「一薰三朱／「一貝(一朱ヒカ)」「一麝(一朱マス) 一朱／麝ハ一朱ヲ二度ニワリテ入也／「沈「貝「白「薰「丁「麝以上／「梅花(春)／「二沈四両」「一丁二両／

(4・裏)「一貝二分」「一甘松二朱／「一麝二朱／荷葉(夏)／「二沈七両二分」「一甘松一分／「一貝二両二分」「一丁二両二分／「一霍一分四朱」「一白一分二朱／「一うこん三分」「一安息香一分／「菊花(秋)／「沈二両」「丁子一両／「貝二分「薰三朱／

(5・表)「甘松三朱」「麝一分／侍従(冬是を用口傳)／「沈四両」「丁子二両／「貝三分」「甘一分三朱／「占唐^{セシタウ}一分三朱(代あり口傳) 以上／「くのへ香の方／「梅花香 後白川右府御しんさく／「かんせう三両」「くわかう二両／「丁子二分二朱」「しつくしや一朱／「木香一分／「せんきう一朱／

(5・裏)「麝のへその皮三朱」「白たん二分／「くんろく一分／「やくしゆとゝのへやう／「一かんせうハあまのくこのやうなる／さけにひたして一夜をきてしほり／あけてよるの寝むしろの下によくつゝミてそのうへにいねてしきほす／「二くわかうハあつききねにつゝミて泉／にて六七とふりすゝきてしほりあ／けてかけほしにする也／「一残のやくしゆハきさミて木きねに／てあらくつきてなすらへて相成の／

(6・表) 用香ににはふ道理としりてたき／ぬれはあしきものさりよき事成／たり菩薩聖衆にもちかつき福／得幸も心になふへしと心へ／ぬれハその匂ひもちかうありてよく／ふかゝるへく侍なれた、いろくにふ(けりかに)／ふけるへき中たちとはかりしれ／らん人ハあわせまなはんもうき世／一の人の心にもなをあまねくハかな／ひかたかるへしとなん／「薫物相承次第」／「一秤斤目事」

(6・裏) 六朱を一分とす、四分を二両とす十二(カ)両／を小の一斤とす卅八両を大の一斤とす小の／三両を大の一両とす小の三分を大の一／分とす／「一おもしのをほそくとへし多分馬尾しかり／「一かなうすの次第」／「一沈白檀薫陸貝香丁子／ある方にハすくなき香より先つくと／あり沈をハのちにつくへき也」／「今案 沈白檀薫陸貝香丁子／(如此口傳)／

(7・表) 「一かなうすあまたにて一度に程なくつき／いたせと有いつれもつきて程へぬれハわろし／いそきくあはすへしことに沈はかりつき／てをくへからす匂うせてわろし／「一香のかはらんだひことに金白きねを能く／のこふへしいまたあはせぬさきには香とも／へちくにをくへしちりはかりも香の／かよひぬれハ香をうしなふ沈丁子ハ／ことに中のあしきものなり／「一香ともおほくいれて金白のはたをは／

(7・裏) のこせ金うすのはたハくさき物なめり／「一金うすの口のめくり紙をたて、きねに／ゆひつけてすきまなくてつくへしけを／もらすへからす香をうしなはしかため也／もろくの香のかはた、そのけにある也／風にふかれては時かねていたくかうはしきを／わろしといふけをたてすかをちらさて／あまつらあはせをしつれハ花やかなる／にほひある也／「一沈をは両数に一二両はかりあ／

(8・表) まりてつくへし／「二飾事^{ふるい}／ふるいにハむらなくうすきぬををハる也／白たんかい香のふるいめのこまか成へし／沈丁子ハめあらかるへし／「一くんろくハ物につきてふるひにももらぬハ／まへにつきたる白たんをちと

とり分てくし／てつきふるふへしこの事秘すへし／「一もろくの香ともふるふ時つよくあら／きもいか、又こまりなるはいのことくにて／

(8・裏) 匂ものにと、まらすよき程にハからふへし／「一梅花ハあらく黒方ハこまか成也その／ゆへハ梅花は花やかに今めかしうあは／すへしくろほうハものふかくおたやかなる／へしこと方とも／これになすらへて／はからふへし／「二和合次第／「黒方 承和秘方／沈 貝 麝 薰 白 丁／「梅花／

(9・表) 沈 丁 貝 白 甘 薰 麝／「侍従／沈 丁 貝 甘 鬱／一散和合様／はこのふたに地うすやうをしきてその上／に沈を置雉のはねにてこれをわかちをく／「一よくくあはせて後にあはせふるひ二度／一合ふるひの後一夜をへてその匂たかひに／そむをよしとす其後にあはすこれ秘傳也／「一あまつらあはせの時合こめて沈二ふんハかり／

(9・裏) うへにあはすへしあまつらのかをへたてんため也／「一黒方にハさかう入過たるいとかうはし／梅花侍従にハさかうおほかるわろし／「一春(丁子) 秋(沈) 冬(薰陸)／あはせん時にしたかひて三朱ハかりくハふへし／「一あまつら和合事／あまつらのあつきハたき物のかをうしなふ／よくさましてあハすへし／「一あまつら入たるによきほとなるハ少とりて／みるに香につかぬほとにて手のはたの／

(10・表) すちつくほとなるをよしとすあまつら入過／してたき物しるくなりたらハ火をけ／の灰にうすやうをあまたしきてし／はしをきたれハかたまるなり／「一冬のたき物ハ合する時うぬ物ひたれとも／程ふれはかたまるゆへにこまかにつき／て心よく和せしむる也／「一夏のたき物ハた、今かたけれとも後／にうるおひいてくるゆへにすこし香を／あらくつくにや／

(10・裏) 「一合つきの事／あはせつきハあらくつくへからすかな／うすにきねのあたれハかなくさくなれハ／中をつ

かんとすへしつきひろけれ／たるをかきあはせくしてむらなく／つくへし／「一つきて後風にあてすといふなり
／一合つきのかす／大の一さい五千小の一さい三千六百／四両三千／二両千五百／

(11・表)・一両千／小四両二千／「一合する時ノ節／梅の香のたかき二月三月九月／あるひハ正月十日ころにあはす
へし／ともいふ／かいかうハおのくの香をよくと、／のへ白たんハとをく匂をとせ／くんろくハをのくの香を
よく物／にとむる也／「後土御門院勅合　れうさう院へたつね／下されこのふん也^{本ママ}／

(11・裏)「御調合の梅花／「沈五両大「丁子一両(大)／「貝香一両(小)「甘松二分／「麝二分(大)／家の方「く
ろほう／「沈一両「丁子二分／「くん一朱半「白たん一朱半／「貝一分(或ハ三朱)「さかう四朱(或ハ三朱)／「梅
花「梅の香ににたるにほひ也)／「沈　三両　丁子　一両二分／

(12・表)「貝一両二分「麝一分／「くんろく一分「白たん一分／「花はちす「はちすのかによそへたり)／「沈四
両「丁子一両二分／「貝三分「うこん一分／「甘松一分／「落葉「(秋の末冬のはしめにもちゆへし時雨する／時
紅葉のちりかゝるに心すきかにやあらん)／「沈九両「丁子四両／「貝一両二分「麝二分／「かうふし二分「白
たん一分二朱

(12・裏)「くんろく一分「さかう一両／「又方／「沈一両二分「丁子二分(かろし)／「貝一分二朱「白一朱／「く
ん一朱(かろし)「かうふし　二朱(おもし)／「麝一朱「さかう二朱／「玉椿(後白川右府　御新さく)／「沈
四両「丁子二両／「甘松一分二朱「貝一両／「くんろく一分／「うこん一分／

(13・表)「さかう三朱／「若草(同)／「沈三両「せんたう三分(代口傳)／「貝一両一分「甘松三朱／「白たん二
分「丁子一両／「くんろく一分「さかう二分／「き菊花(同これをかけハ厄をさけ／命をのふる方なり冬菊のには
ひ也)／「沈二両「丁子一両／「貝三分「くんろく三朱／「甘松三朱「さ香一分／

〔13・裏〕「梅花（同）／「沈」貝「白」くん「甘」麝（各くとうふん）／「蓮葉（同）／「沈三両」かん松三分／「貝一両一分」白一分／「うこん一朱」くんろく二分／「くわ香二分」丁子一両半／「さ香一分半」花たちばな／「花たちばな盧橘」／「沈四両」丁二両／

〔14・表〕「貝二両一分」しやう木香一朱／「くわ香一分」白一両一分／「柏一朱（口伝）」麝一分／「野風」／「沈四両」丁二両／「貝二分」白一両／「薰一両」霍香二分／「青木香一朱」甘松一分／「桂心一朱」麝香一分／「新枕（家方）」／

〔14・裏〕「沈六両」丁子二両二分／「貝二両三分」薰陸二分／「青木香二朱」麝香二分（あはせ様／口傳あり）／「烏方（家の方）」／「沈四両二分」丁子二両／「貝一両」くんろく一両／「白一両」さかう一分／「蘭（家の方）」／「ちん二両」せんたう三分／

〔15・表〕「かいかう一両」かんせう三朱／「ひやくたん一分二朱」ちやうし一両一分／「けいしん一朱」くんろく三朱／「さかう二分」／「千種（れうしやうめん新さくの方也）」／「沈五両」丁二両／「貝一両」白一両／「薰一両」麝一分／「甘二分」麝二分／「仙人方」／

〔15・裏〕「沈二両」丁三分／「貝二分」白一分／「香葉丁香皮二朱」薰一朱／「麝三朱」／「拾遺方（し、うのから名）」／「沈四両」丁二両／「貝三両」薰二分／「白二分」甘二分／「鬱二分」占唐三分（代口傳）／「同方」／

〔16・表〕「沈三分」丁二両／「貝一両」薰二分／「鬱三分」しやうなふ一分（口傳）／「菖蒲」沈一両一分「丁一両」／「貝二分」白二分／「薰一分」鬱二分二朱／「あやめの根一朱」さかう一朱／「二葉」／「沈一両二分」丁二分／

〔16・裏〕「貝三朱」白二分／「甘三朱」麝二朱／以上／
「當家たき物の方のことは」／御代々二つたへきこしめす／御おもむき 勅書ならひに御せいの御たんさくあり

めいふつたるによりて今こ、にうつす所なり／「たきもの、代々の匂ひを」

(17・表) 雲の上につたふる風の／たよりうれしも／「當今へは先年愚老御せんに／をいててう合させられ條々申／入丁／右四辻代々相傳双紙也垂相遠／行之砌口傳等不殘令傳受畢／殊二黒方者　／正親町院以御自筆之方奉／寫者也末代之重寶無比類」

(17・裏) 事也穴賢々々外見停止云々／「于時文祿余曆仲秋日僧都實澄在判」

「侍従(勅方)／「沈二両」丁一両／「貝二分」薰一分／「ウコン一分二朱」又一朱／右一冊以去方之秘本暫時／令書寫了尤可秘々々」

(18・表) 寛文九年十一月十三日 権大納言公規／同十四日一合了／此一冊以今出川前内府(公規公) 自筆／之本令書寫者也／元祿五四晦 兵部尚書(花押) 親王

(18・裏) (墨付けなし)／(裏表紙・裏) (墨付け無し)／(裏表紙・表) (墨付け無し)

【※資料8 参考資料】 24―10止 「薰物方并薰衣香方」 奥書

「當家たきもの、方のことは／禁裏御代々つたへきこしめす御おも／むき 勅書ならひに御せいの御たんさく／ありめいふつたるによりて今こ、に／うつす所あり／たきもの、代々の匂ひを／雲の上につたふる風の／たよりうれしも／當今へは先年愚老御せんにおいて／てう合させられ條々申入了／右四辻代々相傳双紙也垂相遠行之砌口傳等／不殘令傳受畢殊二黒方者／正親町院以御自筆之方奉寫者也末代／之重寶無比類事也穴賢々々外見停止云々／于文祿余曆仲秋日僧都實澄在判／侍従(勅方) 一沈二両 丁一両 貝二分 薰一分 ウコン(一分二朱又一朱)／右一冊以去方秘本暫時令書寫了尤／可秘々々 寛文九年十一月十三日 権大納言公規／(同十四日一合了(朱筆)」。

卷末に「朱文方印…菊亭藏書」「白文方印…公規」の捺印。

【資料9】 24—8 「御薫物方」

- (1・表) (押紙墨書) 「い」／「御薫物方」／(1・裏) (墨付ナシ)／
 (2・表) 黒方二両合／沈香二両二分／白たん二分／貝香一分二朱／丁子三分一朱／くんろく二分三朱／
 (2・裏) 麝香一分／同／ちんかう一両一分二朱／丁子一分二朱／白たん一分／くんろく一分二朱／かいかう三朱／
 (3・表) さかう二朱／同方三両合／沈三両一分三朱／白三分一朱／薰一両／丁子一両一分／
 (3・裏) 麝一分二朱／同／沈一両三分／丁二分一朱／白一分二朱／薰一分三朱／貝一分朱中／
 (4・表) 麝三朱／塩サシニ半分程色ツケハ／サシニ二ツカほと／ホシノ方／沈一両／白一分(つねノヨリモ／アラく)／
 麝一朱／
 (4・裏) 此方自右衛門佐(永慶朝臣／被書進)／新上東門院之处也／ミれう／沈二両／丁一両／貝三分／白一分／
 (5・表) 薰二朱／麝一分／黒方／沈一両／丁二分／薰一しゆ朱中／白二朱／
 (5・裏) 貝一分／麝一分／玉椿／沈四両／丁二両／甘一分二朱／貝一両／
 (6・表) 薰一分／ウ一分／麝三朱／右自中院中納言殿傳之了／寛永四三廿一／三両合／沈三両一分三朱／白三分／
 (6・裏) 貝二分一朱／薰一両／丁一両一分／麝一分二朱／同／沈一両三分／丁二分一朱／
 (7・表) 白一分二朱／薰一分三朱／貝一分朱半／麝三朱／一両合／沈一両／薰一分／
 (7・裏) 白一分二朱／貝三朱／丁二分一朱／麝二朱／右方三しさゐ同断／若草／沈五両／
 (8・表) 麝一両／丁一両／占唐式分／白式分／甘一分／貝三分／薰二分／

- (8・裏) 此方しんさくゑもんつたゆる／ほそかわ三さい方也／梅花／沈二両／丁二分／貝一分半／白二朱／
- (9・表) 薫一朱／甘半朱／ウ半朱／麝半朱／玉椿／沈二両一分／丁二両(かろく)／
- (9・裏) 貝二分／白二朱／薫一朱(重)／茶二朱(重)／新枕／沈四両(重)／丁二両(輕)／
- (10・表) 貝二分／白一両(輕)／薫二両(輕)／甘一分／ケイ一朱(輕)／茶一分／ウ一朱／
- (10・裏) クワツ香二分／シヤウモツ一朱／黒方(親)／沈一両二分／薫一分／貝三朱／
- (11・表) 白一分二朱／丁二分二朱／麝一朱／同二朱(二度二入也)／
- (11・裏) 山ふき／かんせう二分／ちやうし二分／白たん二分／木かう三朱／りやうかう三朱／ういきやう三朱／り
うのふ三朱／さかう二朱／
- (12・表) 九重／かんせう二分一朱／丁子一分二朱／白たん一分二朱／木かう一分二朱／りやうかう三朱／ういきや
う三朱／りうのふ二朱／さかう二朱／
- (12・裏) さらしな／かんせう二分／ちやうし二分／白たん二分／りやうかう一分／うこん一分／ういきやう一分／
しや木かう一分(かる)／りうのふ二朱／
- (13・表) さかう二朱／うてな／かんせう二分／丁子二分／白たん二分／ういきやう一朱／はいそう二分／りやうか
う一朱／うこん一朱／
- (13・裏) りうのふ二朱／さかう二朱／小夜桂／かんせう二分／白たん二分／はい一分／丁子二分／木かう一分／
- (14・表) りうのふ二朱／さかう二朱／
- (14・裏止) (墨付けナシ)

有栖川宮旧蔵御薫物具箱（香合19） 納入資料目録

番号	名称（内容）	法量	形態	年代	数量	備考
1	御薫物具（外箱）	40.5 × 32.5 × 29.0	台差黒塗箱	（江戸後期）	1合	蓋の甲に銀蒔絵字形で「御薫物具」とあり。また、蓋甲と二側面に押紙墨書で「有栖川宮」「御薫物具」とあり。蓋甲と一側面にラベルにて「香合19」とあり。側面に押紙墨書にて「三十八」「御薫物具」とあり。台差の受け部分が紐と共に欠落。身蓋共に内貼の紙が剥離。
2	内箱（黒漆地八重表菊八重裏菊紋散蒔絵）	37.5 × 29.0 × 27.5	黒漆蒔絵懸子付被蓋箱	（江戸後期）	1合	菊紋は梨子地など3種の技法で描き分ける。「御たき物之はこへ入候物」と墨書の水引付き付箋あり。
3	底裂張印籠蓋飾箱（懸子納入入子箱）	丁・沈の箱 12.0 × 9.2 × 9.7 その他 12.0 × 7.7 × 9.7	底裂貼印籠蓋飾箱	（江戸後期）	8合（内、幅大 × 2合・小幅 × 6合）	飾箱の盛蓋と身の側面にそれぞれ金蒔絵で「丁・沈・貝・白・薫・麝・鬱・甘」の字形蒔絵あり。内、丁と沈は幅が広い。懸子の底は、香料の粉末を濾すための大小の目の絹が張られている。丁は絹。貝・麝・白・薫・鬱は平絹。沈は大粗目。甘は牡丹唐草頭文紗。懸子の裂地の縁の紙に墨書で、それぞれの箱の蒔絵の文字と同じ墨書あり。
4	かい甲	18.5 × 11.5 × 2.8位	紙包	（江戸後期）	1包	貝香の実物を小奉書で包んだもの。上書き墨書「かい甲」。（紙包みのため法量に変形あり）
5	（包紙・中身無し）	23.5 × 22.0 × 1.0	包紙	（江戸後期）	1枚	「昆布 一箱 干し蕨 一箱 御樟 一荷 以上」大高檀紙堅目録の反古利用。
6 1	（包紙）	18.8 × 12.5 × 1.0	包紙	（江戸後期）	1枚	（白紙）
6 2	御目録（香道具目録）	16.5 × 4.5	折紙	（江戸後期）	1紙	【資料1】として翻刻掲載
6 3	（重陽着綿記事抜書・年中行事・源氏物語幻・枕草子・紫式部日記・世説問答）	16.5 × 9.3.5	純紙	（江戸後期）	2紙	「年中行事 九月 九日、書司献菊花事、・・・。早旦書司女官立鸞足内机二御於御座間孫相（各其下敷小筵）其上居大花瓶各一口差菊花（以綿掩花上）臨昏撤之」源氏物語 まほろし 九月になりて九日わたおほひたる菊を御覧して・・・。」
6 4 1	（包紙）	6.0 × 11.6	包紙	（江戸後期）	1枚	（白紙）
6 4 2	漢籍抜書	11.4 × 6.3	切紙	（江戸後期）	1枚	「督呈 前漢司馬遷史記百二十八卷亀策伝二亀運ノ事ヲ載セリ、明ノ祝穆ガ事文類聚三十五卷龟部二宋蘇軾ガ詩二句ヲ引ケリ」朱筆あり。

8 3 止	8 2	8 1	7 11 止	7 10	7 9	止 7 8 2	7 8 1	7 7	7 6	7 5	7 4	7 3	7 2	7 1	6 7 止	6 6	止 6 5 2	6 5 1	
箸	篋	(包紙)	(香料種類書上)	(子日一方合わせ様)	(白梅二方合わせ様)	藿香正氣散	(包紙)	(薫物贈答和歌四首)	(黒方・玉椿・仙人の合わせ様)	靈元院御流和合次第	蜀薬之方	(春風・山桜・花橘・若紫・手枕の調合明細)	匂袋之方(勸方十六種)	(包紙)	列伝第六十八 太史公曰自古聖主	御所望被遊候覚	薫物ノさしノ形	(包紙)	
最短 24.5×直径 0.4	最長 28.5×直径 0.6	最大 28.8×3.0×0.7	56.0×43.7	16.7×7.7	16.2×46.3	16.3×46.1	16.5×18.5	19.0×4.5	17.8×29.1	16.5×47.2	17.2×150.5	16.0×31.0	15.5×64.5	15.5×22.5	20.0×14.0×3.0	16.5×23.4	15.5×44.5	24.0×18.3	23.5×15.0
竹箸	竹篋・竹刀	箸篋 包紙・竹製	切紙	切紙	折紙	切紙	包紙	染紙切紙	折紙	続紙	切紙	続紙	横半	包紙	折紙	折紙	切紙	包紙	
(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	
9膳	篋6・刀1	1枚	1紙	1紙	1紙	1紙	1紙	1紙	1紙	3紙接合	1紙	3紙接合	1冊(4丁)	1紙	1枚	1枚	1枚	1枚	
黒い香料付着。皮を残して削り出し。	黒い香料付着。全皮削ぎ2本はかは皮つき。	上書き墨書「享和元六御改 あんへら四本へら一本 すみのさち二本 すミのはし九つかひ入」一部欠損	「沈白貝 薫 丁 磨」	「子日 沈三兩 貝三分」	「白梅 沈一兩 丁二分」	「藿香正氣散 四時不正ノ氣ヲウケ或ハ内傷ニ外寒ヲ挟ミ・・・」	上書き墨書「藿香正氣散本方醫書通」	公敦・後土御門院・家(ママ) 空・義平各1首	折紙表裏墨付	【資料4】として翻刻掲載	「蜀薬之方 蜀一羽黒焼 雀一羽黒焼 蜜柑一ツ黒焼・・・」	3紙接合	【資料3】として翻刻掲載	上書き墨書「薫もの合せやう 秘本」	「孫氏瑞応国日亀物神異之介蟲也・・・」	【資料2】として翻刻掲載	匙の図あり。	上書き墨書「薫物ノさしノ形銀なり」。	

9-1	(包紙)	御焼物方組	9-2-1	御焼物方組	9-2-2	辟穢丹(合わせ様)	9-2-3	(九重・ユウケツ・竹門主方三種 合わせ様)	9-2-4	(八重・九重・山ふき・九重・蚊遣 火方・同方合わせ様)	9-3止	竹箸	10-1	(包紙)	10-2止	丁子篋	11-1	御たき物ノ方	11-2	(黒方 合わせ様)	11-3	花月香	11-4止	ほと、きす香之記	12-1	(包紙)	12-2	東三條さまの方御匂ひ袋の寸法	12-3	中院前右府匂袋之寸法	12-4止	匂袋寸法	13-1	御ふるいの御きれとも	13-2	生絹白平絹裂	13-3	白麻綴織裂	13-4	生絹白平絹裂																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
33.3 × 44.8			19.0 × 7.5		15.6 × 22.3		18.0 × 34.3		16.7 × 46.5		21.3 × 1.9	41.4 × 28.4	最長 24.7 × 0.9 × 0.3	22.0 × 8.0	19.0 × 52.8	14.2 × 38.3	14.1 × 18.1	19.6 × 5.5	9.4 × 6.5	11.0 × 6.8	18.2 × 12.1	32.0 × 21.0	99.5 × 43.0	18.2 × 28.0	22.8 × 28.5																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		

17 13	17 12	17 1	16	15 2止	15 1		14 2止	14 1	13 17止	13 16	13 15	13 14	13 13	13 12	13 11	13 10	13 9	13 8	13 7	13 6	13 5
(茶・伽羅・龍腦調香寛)	後水尾院御方雅楽頭行直以自筆 本書写之	(包紙)	(不詳香料粉末)	(へらほか11品目録)	目録	羽		(包紙)	生絹白平絹裂	生絹白平絹裂	生絹白平絹裂	濃緑地無文紗裂	生絹白平絹裂	生絹白平絹裂	生絹白平絹裂	生絹白平絹裂	白麻縦織裂	浅葱麻縦織裂	生絹白平絹裂	生絹白平絹裂	濃緑地一重蔓牡丹唐草文頭文紗 裂
15.1 × 20.9	15.1 × 20.9	16.8 × 7.6	13.8 × 9.5	16.2 × 45.8	17.8 × 13.1	26.3 × 3.0 程		30.2 × 18.5	56.5 × 43.0	88.5 × 43.3	35.0 × 28.5	16.5 × 25.4	10.7 × 14.0	17.7 × 8.8	20.8 × 38.1	26.5 × 13.5	47.5 × 37.0	32.5 × 41.0	41.0 × 13.3	27.0 × 4.4	28.3 × 54.8
切紙	切紙	包紙	包紙	折紙	包紙	羽	包紙	裂	裂	裂	裂	裂	裂	裂	裂	裂	裂	裂	裂	裂	裂
(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)
1枚	1枚	1枚	1包	1枚	1枚	41本	1紙	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚
「茶／麝香一両 沈香一両…」	「後水尾院御方雅楽頭行直以自筆本書写之」	上書き墨書「御たき物御聞書」	(茶色の粉末・詳細不詳・麝香カ)	「へら三本／笏式本／さし毫本…」	目録	羽根の軸の巻紙の墨書内訳「(無名・9本・ちやうし(てうし)・4本・ちん・3本・こあわせ・4本・しやうもつかう・1本・たくしや・1本・けいしん・1本・かいかう・2本・さかう・3本・うこん・4本・かんせう・2本・くんろく・2本・ひやくたん(白たん)・4本・くわかう・1本)」	裏側に墨書「はね 十本」	(13 16より糸は細い。)	(13 16より糸は細い。)	(13 2より折り目が密。織耳付)	(13 6の連れか。織耳付)	(13 6の連れか。織耳付)	(13 6の連れか。織耳付)	(13 6の連れか。織耳付)	(13 6の連れか。織耳付)	(13 3の連れか。両織耳付。)	(13 3よりは眼が細かい)	(13 6の連れか。織耳付)	打付墨書「きかう・うこん くんろく」(織耳付)	打付墨書「かんせう」(両織耳・織留あり)	

23 1	22 2止	22 1	21 7止	21 6	21 5	21 4	21 3	21 2	21 1	20 2止	20 1	19 2止	19 1	18 2止	18 1止	17 5止	17 4	
(包紙)	羽	(包紙)	白正絹平織裂	白正絹平織裂	白正絹平織裂	白正絹平織裂	白正絹平織裂	白麻平織裂	(包紙)	塩のさじ	(塩の匙・包紙)	麝香すり	(麝香すり・包紙)	麝香箸	(麝香箸・包紙)	(調香明細)	(罝紙)	
31.5 × 7.5 × 2.0	26.3 × 3.0 程	27.8 × 10.3	21.5 × 26.5	30.0 × 21.5	27.0 × 21.0	29.5 × 21.0	13.0 × 15.3	34.0 × 32.5	24.5 × 11.0	22.5 × 2.4	匙 19.0 × 2.8 ・ 寛	22.8 × 5.0	2.8 × 2.8 × 18.8	3.5 × 20.0	最長 28.5 最短 18.5	31.5 × 7.5	18.4 × 25.7	12.2 × 9.0
包紙	羽	包紙	裂	裂	裂	裂	裂	裂	包紙	匙・寛	包紙	すり棒	包紙	竹箸	包紙	切紙	切紙	
(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	
1紙	6本	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	各1本	1枚	1本	1枚	30本	1枚	1枚	1枚	
上書き墨書「あんへら六本 同 かくあんへら二本 じやかうをし二本 同さち一本。裏側に「あんへら 四本 すみの」(いずれも見消)とあり。	(無名)・2本。 かいかう・1本。 かんせう・1本。 さかう・ 2本)	上書き墨書「御にはひ袋のはね 六ほん」	(織耳有。 21・5の連れカ) 上書き墨書「こしやうもつ かう」	(織耳有。 上書き墨書「けいしん」	(織耳有。 21・3の連れカ) 上書き墨書「たくしや」	(織耳有。 21・3より糸細く光沢あり) 上書き墨書「く わかう」	(両織耳有。 3・7止をすべて包む) 上書き墨書「ちん のこふるい」	上書き墨書「御書つけのとをりふるひはこの外 ふる ひのきれ」	匙状・1本・錠状・1本	上書き墨書「塩のさじ」	六角水晶・桜柄付。 柄の石突に「麝」と墨書あり。	上書き墨書「麝香すり」	(長短合わせて30本)	上書き墨書「じやかうはし十二つがひ (内側に「入用 の事にていたしをく也」と墨書)」	「かんせう四両／ちやうし二両一分…」	(罝紙・墨付きなし)		

24 8	24 7	24 6	24 5	24 4	24 3	止	24 2 2	24 2 1	24 1	23 2 止
御薫物方	薫物方（當家薫物香具拵様の口傳）	薫物故事	幸い仁親王筆（四辻家相伝薫物伝書）	幸仁親王筆（薫物のほうさまくなれともつねにあはするは六くさなり）	候・・・（炭方禁中ヨリ慶長元十二傳）	しほさしわけのはし	（包紙）	（包紙）		あんへら
118 × 107	146 × 198	139 × 202	160 × 172	143 × 203	185 × 405.0	21.7 × 0.4	24.5 × 4.8 × 0.8	32.8 × 45.5	16.6 × 1.6 × 0.1	皮付飾有…29.0 × 2.8 × 1.0・皮無直刃… 25.7 × 2.3 × 0.3・皮無 丸刃…26.2 × 2.0 × 0.3・皮無先刃…24.0 × 1.8 × 0.2・短篋…
横半々	横半	豎半	横半	豎半	続紙	竹箸	包紙	包紙		竹篋
（江戸後期）	（江戸中後期）	（江戸後期）	元禄5年4月 30日	元禄5年5月 1日	（江戸中期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）		（江戸後期）
1冊 （13丁）	1冊 （29丁）	1冊 （45丁）	1冊 （18丁）	1冊 （11丁）	8紙接合	2本	1枚	1枚		6本
【資料9】として翻刻掲載。朱筆書入あり。	表紙は柿渋刷毛目で墨書打付書で「薫物方」とあり。一部朱筆あり。	奥書に「去年當家薫可有御口傳之由從禁裏被仰下宸翰之奉書二通有之仍後白川殿別口傳之様悉申入畢今度又重本方御所望之間可令進上之由申入處再往御辭退可寫進之由被仰之間書進之由依仰如此書之草子寸法大略同本方 上奥書 此方者當家代々令相傳之秘本也殊白川右府好此事妙有故實傳薫傳云々其子細後押小路内府今後三條相國之由見奥書畢」とあり。	【資料8】として翻刻掲載。朱筆書入あり。	【資料7】として翻刻掲載。朱筆書入あり。	【資料6】として翻刻掲載。後西天皇宸翰カ。	皮をすべて削ぎ、先端から6.8cmまでは直径が2mmづつ細く削出す。	上書き墨書「一 しほさしわけのはし二本」	上書き墨書「御たき物の御本 御かき付色々 御はしも入候」	皮付飾有…1本・皮無直刃…1本・皮無丸刃…1本・皮無先刃…1本・短篋…2本	

30 1 3	30 1 2	30 1 1	29 2 止	29 1	28 4 止	28 3	28 2	28 1	27 2 止	27 1	26 2 止	26 1	25 2 止	25 1	24 10 止	24 9
うてな（包紙）	こゝの重（包紙）	包紙（無地）	麝香のはし	（包紙）	茱萸袋之図	野宮前大納言定之卿勘（茱萸袋之図）	滋野井前大納言公麗卿勘（茱萸袋之図）	茱萸袋之図	丁子篋	（包紙）	御塩のあんへら	（包紙）	笏	（包紙）	薫物方并薫衣香方	焼物方
21.8 × 15.5	23.2 × 14.7	26.5 × 19.5 × 2.3	18.5 著・最長 26.2・最短	42.7 × 32.0	28.3 × 31.1	28.2 × 39.8	28.3 × 40.0	28.0 × 19.0	28 × 1.0 ・ 28 × 3.5 × 0.3 ・ 24.9 × 3.5 × 0.3 ・ 竹製 篋・ 14.8 × 2.5 × 0.4	竹皮節付篋・ 29.5 ×	44.0 × 30.0	28.0 × 2.8 × 0.8	45.3 × 31.2	24.9 × 3.5 最大 × 0.2	40.0 × 28.0	24.2 × 19.3
包紙	包紙	包紙	竹箸	包紙	切紙	堅紙	堅紙	包紙	竹篋・ 桜笏	包紙	篋	包紙	竹笏	包紙	堅	堅
（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	（江戸後期）	寛文9年11月 3日	（江戸中期）
1枚	1枚	1枚	4本	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	各1本	1枚	1本	1枚	1本	1枚	1冊 （22丁）	1冊 （47丁）
上書き墨書「うてな」（中身無し）檀紙	上書き墨書「こゝの重」（中身無し）檀紙	2と22止まで一括	皮節付・1本・削り出し・3本	上書き墨書「麝香のはし」	（着彩茱萸袋之図）	（着彩茱萸袋之図）「典葉寮云 九月九日呉茱萸二十把付葉司・」	（着彩茱萸袋之図）「典葉寮式 凡九月九日呉茱萸廿把附葉司・」	茱萸袋之図	短い竹篋は皮をすべて削ぎ、長い方は皮を残す。笏は蛤歯で板目材。	包紙上書き墨書「ちやうしへら 十本」	竹製元節で、片面に皮を残し切先状に先端を削出す。	包紙上書き墨書「御塩のあんへら一本」	肉厚節無しの黒竹を総皮削で蛤歯に削出す。	包紙上書き墨書「御かさね遊し候節の御しやく忝本」	24・5と同内容。巻末に「朱文方印・菊亭藏書」「白文方印・公規」の捺印あり。元禄5年辛仁親王書写による24・5の祖本か。朱書あり。	表紙に「焼物方」と打付墨書。37丁に「石此方小倉實起卿本ニ而令書写 寛文二寅八月廿五日写終 宜清」とあり。また、46丁の奥書に「石大秘書他見無之者也ト云々、延宝九辛酉八月日書之」とあり。

32 1 2 止	32 1	31 1 2 止	31 1	30 22 止	30 21	30 20	30 19	30 18	30 17	30 16	30 15	30 14	30 13	30 12	30 11	30 10	30 9	30 8	30 7	30 6	30 5	30 4
紅染絹裂	(包紙)	眉作り刷毛	(包紙)	玉椿(包紙)	うこん(包紙)	ちん(包紙)	白たん(包紙)	ちやうし(包紙)	くんろく(包紙)	仙人(包紙)	千年菊(包紙)	小夜まくり(包紙)	子日(包紙)	かいかう(包紙)	こあはせ(包紙)	ねみたれ髪(包紙)	仙人(包紙)	ちん(包紙)	黄菊花(包紙)	八重ひとへ(包紙)	さかう(包紙)	かんせう(包紙)
40.0 × 37.0	24.5 × 9.0	細刷毛太さ0.8長1.5 太刷毛太1.0長2.0 刷毛…12.5×径…1.4。	包紙 6.5×14.0×2.0	23.4 × 18.6	22.9 × 17.2	23.0 × 17.3	22.8 × 17.2	22.6 × 17.2	22.7 × 17.2	21.6 × 18.4	21.9 × 18.4	21.1 × 15.0	21.3 × 18.5	23.0 × 17.2	22.7 × 17.2	22.9 × 14.8	20.8 × 18.3	22.9 × 17.2	22.3 × 18.1	22.8 × 15.0	22.8 × 17.2	22.9 × 17.2
裂	包紙	刷毛	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙	包紙
(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)
1枚	1枚	1本	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚
両耳付	上書き墨書「かねの御きねにてつよきやうなる時此木のきねにてつき申候也」	白竹軸両頭刷毛。太細の差あり・4	上書き墨書「まゆつくり」	上書き墨書「玉椿」(中身無し) 鳥の子 虫損あり。	上書き墨書「うこん」(中身無し) 鳥の子	上書き墨書「ちん」(中身無し) 鳥の子	上書き墨書「白たん」(中身無し) 鳥の子	上書き墨書「ちやうし」(中に若干の粉末残存) 鳥の子	上書き墨書「くんろく」(中身無し) 鳥の子	上書き墨書「仙人」(中身無し) 打曇紙	上書き墨書「千年菊」(中身無し) 鳥の子 虫損あり。	上書き墨書「小夜まくり」(中身無し) 檀紙	上書き墨書「子日」(中身無し) 打曇紙	上書き墨書「かいかう」(中身無し) 鳥の子	上書き墨書「こあはせ」(中身無し) 鳥の子	上書き墨書「ねみたれ髪」(中身無し) 檀紙	上書き墨書「仙人」(中身無し) 鳥の子	上書き墨書「ちん」(中身無し) 鳥の子	上書き墨書「黄菊花」(中身無し) 打曇紙	上書き墨書「八重ひとへ」(中身無し) 檀紙	上書き墨書「さかう」(中身無し) 斐紙	上書き墨書「うてな」(中身無し) 斐紙

止 40 止 1 2	40 止 1	39 27 止	39 1	38 2 止	38 1	37 2 止	37 1	36 2 止	36 1	35 2 止	35 1	34 2 止	34 1	33 2 止	33 1
(龍腦用鉢)	(包紙)	(麝香用鉢)	(包紙)	(丁子用鉢)	(包紙)	(麝香用鉢)	(包紙)	(鉢)	(包紙)	龍腦押篋・箸	(包紙)	龍腦篋	(包紙)	塩のさじ	(包紙)
6.0 高さ.. 2.7	口徑.. 10.0 底徑.. 23.0	5.9 高さ.. 2.9	口徑.. 11.3 底徑.. 23.0	6.2 高さ.. 2.7	口徑.. 9.7 底徑.. 23.0	5.4 高さ.. 3.0	口徑.. 10.7 底徑.. 23.0	6.0 高さ.. 2.7	口徑.. 9.5 底徑.. 23.0	20.0 × 0.3	短篋.. 12.8 × 2.1 著	長い篋.. 16.6 × 1.2	包.. 22.4 × 4.5	短篋.. 14.0 × 2.4	長篋.. 16.5 × 1.5
鉢	包紙・木綿	鉢	包紙・木綿	鉢	包紙	鉢	包紙・木綿	鉢	包紙	包紙・篋	包紙	竹篋	包紙	竹篋	包紙
(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)	(江戸後期)
1 口	各1 枚	1 口	1 枚	1 口	1 枚	1 口	各1 枚	1 口	1 枚	2本・1 膳	1 枚	2 本	1 枚	1 本	1 枚
口縁にかけ。口縁から外側、土見せギリギリまで鉄軸をかける。削り出し底。包紙に「りうのふ」とあり。	―	口縁にかけ。口縁から外側、土見せギリギリまで鉄軸をかける。基筒底。底径の部分の軸溜を削り落とし。底面に「麝」と墨書。削り出し底。	―	口縁と内側少々、側面に少々鉄軸をかける。削り出し底。底面に「丁」と墨書。	―	口縁にかけ。口縁から外側、土見せギリギリまで鉄軸をかける。削り出し底。底径の部分の軸溜を削り落とし。底面に「麝」と墨書。	―	口縁と内側少々、側面の土見ギリギリまで鉄軸をかける。削り出し底。	―	篋2種。箸1膳。	上書き墨書「龍腦をしへらはし」	竹皮削ぎ篋2種。	上書き墨書「りうのうへら 三本」	竹皮付き一部皮削ぎの篋。上書き墨書「塩のさじ」	竹皮付き一部皮削ぎの篋。上書き墨書「塩のさじ」